

九 中島新校地へ

古市町より
の迎え

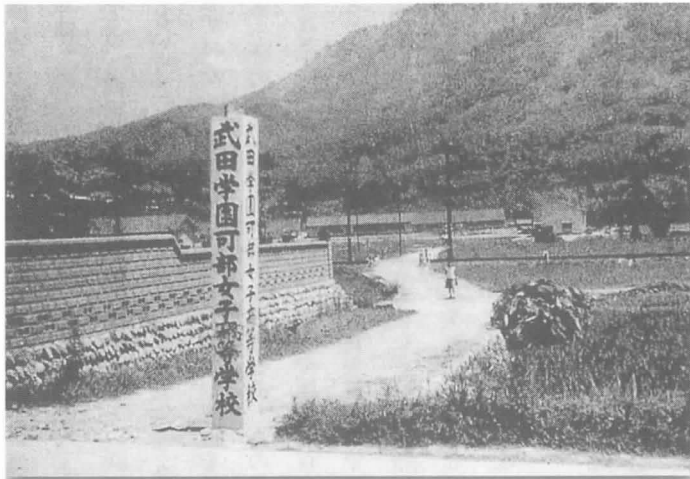
記事が前後したが、火災の翌々日、古市町長加崎喜代三氏が来校になり、「実は昨日、臨時町議会を開催して、武田学園に古市町に戻ってもらおうという決議が出来たのだが、どうか帰って来てく

れないか。校舎は、大町小学校を空けて貸与しようということになった。」と、誠に有り難い、もったいないお話を
 持ち込んで下さったので、私の感謝と感激は一人であつた。武田学園をそのまま思つて下さる古市町の町民の方々の
 温かい御心、その優しい御心にすぐお応えできなかったのが、今
 もなお申し訳なく、心残りがしている。

お応えできなかった大きな理由は、まず、可部町中島地区に七
 千坪の土地を地区の方々に学校を創るのだからといって譲渡して
 もらったばかりの時期であつたこと。次に、県庁への高等学校認
 可申請書に、学校の所在地をこの中島として認可を受けていたこ
 と。今一つは、創立前から学校所在地を可部町にしたいと思つて
 いたことなどである。

学校所在地を可部町にと思い、考え続けてきた自分の心理が、
 自分ながら今でも時には不思議に思うのである。それは、可部町
 のごく一部の方々ではあるが、武田学園に対して必ずしも好意を
 持つて下さっていない感じをたびたび受けることがあるにもかか
 わらず、ついつい可部の地に執着するからである。

その一部の方々の言葉の一、二を挙げれば、この中島の土地を
 購入したとき、ある人が「武田はよそ者だから何も知らずにあの
 中島の「荒廃」した土地を買ったそうだが、今に大水に押し流さ



可部女子高等学校（中島校舎）入口 1959年

れるであろうに、「云々」。また或るときは、町役場の助役さんと衛生課主任が来校され、「学園の裏に町の屎尿^{しにょう}処理場を設置しようと思う、「云々」、驚いた私は、学校環境衛生上良くないと強く言つて断念してもらつたこともある。また、或るときは「武田はどんだん金を儲けては、校舎を次から次へと建て、武田株式会社だ、「云々」。そして「武田学園は頭の悪い子が行く学校だ。」などと、町民の方々が言われているということ、たびたび耳にしてきたのである。

私は、「教育は普遍的である。秀才だけを集めて教育するのが教育ではない。高等学校教育を受けたい意欲を持つ者に対し、高校の課程が終えざるだけの能力があれば、秀才でなくともその意欲を満たしてやることこそ、真の教育である。」と確信している。頭が良くて、人間的に欠けていたのでは社会のためにならない。数学や国語で百点がとれなくても、人間的に百点の人こそ、社会を浄化し社会に貢献することが出来ると信じている。資金難の中で校舎を建設していく学校経営の苦しさを解ってもらうことなど考えないにしても、金儲けとか株式会社などという評語は嬉しい言葉ではない。こんな苦しい中でも、地域社会のためにも思い、文化の中核となる学問の府を拡張していこうと努力してきていることなど全然わかつてもらえないことは、いささか寂しい感もしないでもないが、そんなことは教育の大局から考えれば問題ではない。そんな小さな問題にこだわっていたのでは、教育の仕事は出来ないのです、信念を持つて発足した教育であり、また、信念を持つて選んだこの地である。町民や周囲のことなどどうであれ、とにかく一生懸命にやり通そう、と自己に鞭打つて初心の貫徹に努力を傾倒することが肝心なことだと信じ、可部の地を動かないことにしたのである。

中島新校地造成 校舎新築・移転

土地造成は資金の都合で、一棟の校舎を建てる所だけを土木工事専門の原田権右衛門氏に依頼した。校舎は設計を河内設計事務所^{カニ}に託し、建築施工は可部町の竹野下組に依頼し、現場監督は、当時町役場の建築課勤務の上中敏雄氏に勤めの合い間に見てもらふことにして、施工実施に入ったのが八月の初



中原校舎から中島校舎へ初入校 1958年

めであった。建物は木造モルタル二階建て、延べ三百三十坪である。竣工が十二月二十五日で、施工者から施主に引き渡された。

一方、焼けた校舎の棟に松材で一尺七寸に二尺角の五間ものが八本もあったのが、真^{しん}まで焼けていなかったのをそれを主材として、五間に十二間の小さい講堂を建てることにしたのであるが、元より土地造成は生徒や教職員に協力してもらって五日間で行い、十月の初めに取りかかった。施工者は、当時父兄の土井武俊氏に依頼したのである。竣工は、三十三年一月二十八日である。(これは、数度移転改築して、現在大学の小講堂として活用している。)

新校舎に移ったのは、三十三年(一九五八)一月三十一日。当日の午前八時三十分に全校生徒は旧校庭に集合し、旧校舎との別れの式を厳^{おごそ}かに行った。九時二十分、最高学年の重光幸子さんが旗手となり、校旗を先頭に懐しい学舎と涙の別れを告げ、二列縦隊で、三八二名の生徒が隊伍を整えて新校舎に喜びと希望で胸をふくらませて入ったのである。あのとときの感激はとも筆舌に表わしきれないものがある。今もなお私の脳裡に胸中に強く残っている。

七千坪に近い広い校地の中には、田んぼあり畑あり藪ありで、広漠たるものであった。



寄宿舎の炊事風景（寮生が当番制で炊事をしていた）

全体の校地の造成は当分できそうにないので、四反ばかりの田んぼを三年間ほど舎生を主体として耕作した。取り入れの時期には、教職員の方々にも援助を仰いだ。また野菜も作って舎生の食糧に充当したものである。食糧難のときでもあり、当時の舎生は、食材の現物持参ということになっていた。（最少限度の学資で最大の教育効果を挙げ、役に立つ、間に合う人材の育成ということが、私の教育目標の一項目にしているのだ。）

寄宿舎の調理は、初めから教育即生活という意味で、学校に於て学習した調理の実習の場として、生徒たちに輪番で食事の用意をさせていたので、作った米はもちろん、大豆は豆腐として、菜種も油として、食膳にのぼらせていたのである。だから、当時の生徒は、炊事当番となれば、朝四時に起き、六名で二百余名の舎生の食事を作っていたのである。三十三年度中の寄宿舎は、可部駅裏の旧校舎の中にあつたが、その炊事場の設備は小規模で平釜が四つだった。朝はまず二つの釜に弁当分の御飯を、一つは弁当のおかずを、一つは味噌汁を炊くので、結局御飯は二回炊いていたのであるが、結構時間には間に合わせていた。炊事当番の日は、みんな緊張して頑張っていたので、一年のときより二年に、二年より三年と、段々と台所の切り廻しも良くなり、また味付けも上手になり、家庭の主婦ぶりが身について、女性として良き修行となっていたのである。

当時は、生産から消費経済までを舎生が司っていたわけである。

校地整備

校地の造成も、生徒や教職員の協力のもとに、田畑の作付けを年々減らしつつ、運動場作りなどを少しずつやったのである。

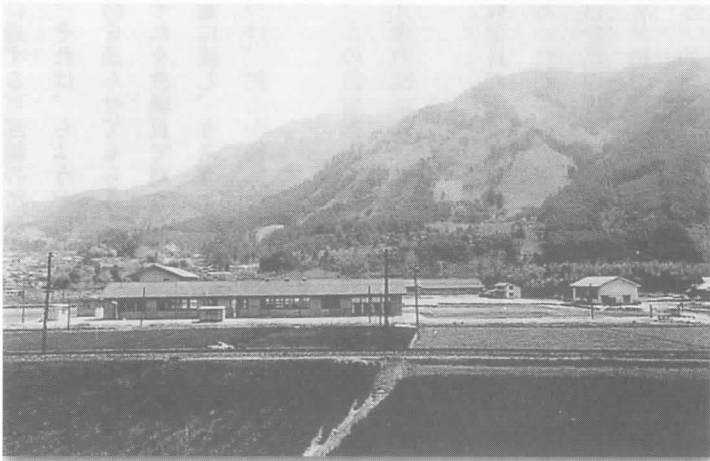
三十三年度中は、旧校地から朝五時に起きて新校地に出かけ、七時半までは教職員と舎生とが新校地の土地整備のために、竹の根を掘り起こしたり土を運んだりした。毎日の放課後も精出した。

あるとき、藪の竹の根を掘っていたら、宮本教諭から「ブルドーザーに頼んでやってもらいなさい。そうすりゃ一遍できれいになりますよ。」と言われた。「でも金がかかるので。」というとき、「約手を書いて後から払いなさいやー。」と教えられた。約手というのはどういうものですかと聞くと、その方法を詳しく教えて下さり、初めてそんなやり方もあるということを知ったのである。

さっそく、ブルドーザー屋さんの所へ相談にいったら現地を見てもらって見積らせたなら、五万円で出来るということで依頼した。七百坪ばかりのところが一時間できれいになった。改めて機械の力の偉大さを強く感じたものである。結局は、五万円の代金を約手にせず現金で支払ったことである。

中島校地進入
道・鈴蘭橋造り

新しく求めたこの中島校地は、当時は民家から三百メートルくらい離れた田んぼの中で



中島校舎の全景（手前は可部線） 1960年

あった。したがって人の往来する道はなかったが、元の可部町本通りに通ずる可部線の踏み切りの所から入ることが出来るので、この所をまず通路とすることにして、道づくりを始めた。それは、ちようど踏み切りの所から校地の前の古川に合流する小川があり、その小川に沿って、一メートル幅の堤防を通らせてもらうことにしたのである。その堤防には、その小川が見分けのつかぬまでに長い草が繁茂していた。それを教職員で刈り取った。次は橋かけ作業である。旧校地より焼けて黒こげになった校舎の材木を運び、堤防と校地に渡し、カスガイ釘で頑丈に止め、その上に柴木を置いて土を盛り、両側にどっしりした黒光りのする材木を打ちつけ、何とか格好を整えた。素人造りにしては上出来であった。

この橋の命名は、本学園の校章の鈴蘭を引用して「鈴蘭橋」とした。この鈴蘭橋の渡り初めは、本学園最年長者阿部善五郎教諭（六十九歳）を先頭に、武田、峯元、躍場、宮本、小田正彦教諭の順にテープを切って、渡り初め式を行った。

この道作り橋造りには、生徒の手を借りず、峯元教頭を筆頭に教職員全員で三日間で終えた。当時、小田正彦教諭はその年の三月に山口大学を卒業したばかりの新進気鋭の青年教師であったが、この道作り橋造りに、水はあまり流れてはいなかったけれど、その小川にズボンを臍膝までまくり上げ、白い足のまま長い草の中に潜り込んで、何一つ不足を言わず黙々と草刈りをして下さった。先生その姿は、今もなお私の目に心に深く刻みついている。いや小田教諭のみでなく、そのころの教職員は、我が学園を生徒を如何に愛し、如何に大切に考えて下さっていたことか。この一つや二つのことだけでなく、この学園の基盤は、伝統は、こうして身も心も打ち込んで精進努力下さった教職員の方々のお蔭で作られたのである。この御恩は常に私の脳裡から離れたことではないのであるが、今日これを記述するにあたり、改めて心からの謝意を表します。

私学振興会 より借入れ

第一校舎の建築費は高等学校設置認可申請時に用意しておったのだが、次々と校舎も建てねばならぬので、私学振興会で火災復興費の借り入れのお願いに、三十三年（一九五八）一月八日に上京した。（十年間も病床にあつた身体であるので、少々不安でもあつたけれど。）そして私学振興会の専務理事である高木一郎先生にお会いして事情を述べ、借り入れをお願いした。

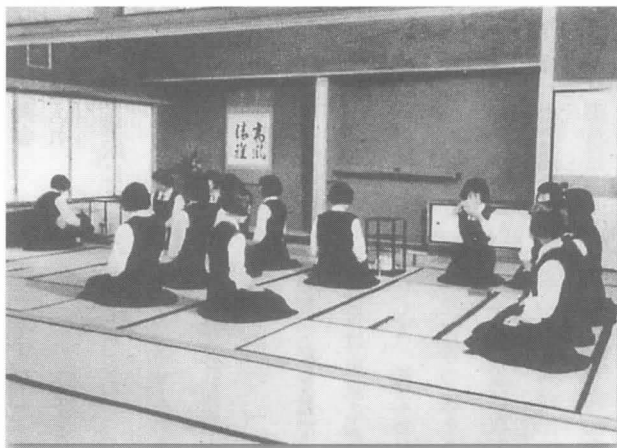
そのときの一般の貸し付けは支払年限が五年で、災害の場合は十年ということであつた。私はそんなに長く借らないうで早く支払つて安心したいと思ひ、「一般の貸付期間で支払いますから、そのように手続きして下さい。」と申したら、係の方が不思議そうな顔で私を見て、「他の学校とは反対です。他の学校は少しでも長くしてほしいと言われるのですが。」と言われた。借金は出来るだけ早く返すというのが、私の主義なのである。

とにかく借用することにして、教えられるままにまず借り入れ申し込みの用紙に記入をした。次の段階は、正式な借用証書作成である。担保物件等の色々な書類手続きがあるので、それらを詳細に御指導いただき、必要書類の用紙一切をいただいで帰校し、書類作成に取りかかった。何しろお金を借り入れることは初めてのことで、よくよく聞いて帰つたと思うのに解らぬところが出てきた。崇徳高校の事務長さんが詳しいと聞いたので、御指導にあずかりに行った。事務長さんから懇切丁寧な御指導をいただいで書類を整え、お願いを兼ねて書類を持って再び上京したのであるが、そのとき振興会の方では、郵送で良かったのに、わざわざ持参されなくてもというお言葉であつた。事務的にはそれで良いのかもしれないけれど、それでは私の心が許さない。借り入れる者としては、礼を正してお願ひに上るべきだと思つていたからである。

それから二カ月後の三月末、三百万円の申し込み通りの金額の貸与が許され、広島銀行可部支店に送金していただいた。

特別校舎建築

借り入れの三百万円を元にして、神原理事からの寄附を合わせて特別校舎を建てることにした。設計は河内設計事務所、工事は竹野下組に施工してもらい、同年十月三十一日に竣工したのであるが、なかなか立派な校舎（木造平屋建て、一九五坪）が出来上がった。礼法室・調理室・理科室・被服整理・染色室等である。



「礼法」の授業 1959年

この特別教室の校舎は、当時としては随分完備していると好評をいただいたものである。県の文教係の信田主事が来られて、「こんな立派な理科室がありますか……。」と言われた。武田学園の高校出発は家庭科からであったから、そんな言葉も出たのであろうと思う。家庭科こそ理科系の学科であると、私は意識して作ったのである。また、礼法室が、県下の高校には見られない規模と設備を備えているのを目を見張られたようであった。

礼法室の施設設備を充実させたのは、この学園発足の主旨の一つとして、日本女性の麗わしい伝統を失わないで、ますます高揚していく女性を育成しようという意味から、学園訓の中にある「謙虚にして優雅な人になりましょう」。すなわち、慎みのある礼儀の正しい上品な人を育てる場としての施設として、礼法室を完備させ、専任の礼法教師を置いたのである。

調理室のユニットキッチンも、都会向きと農村向きの二種類を

作ったが、それが十六年後の今日、各家庭の台所に用いられてきている。当時は、この施設を方々から見学に来られたものである。

この建物を建てる資金は用意できたけれど、土地造成費がないので、自分たちで敷地を造成した。昭和二十年（一九四五）十月十七日の豪雨で、太田川が氾濫してこの地一帯が押し流されたときの土や石が、あちこちの田や畑に山積みとなっているのを運送屋に頼み運んでもらった。積み荷、荷下ろしなどは生徒に手伝ってもらって、あまり金をかけずに敷地を作ったのである。

考えてみると、当時の生徒はなかなか愛校心に燃えた生徒が多かったと思う。なかには少々不平のあった者もいるであろうけれど、それを言葉にも態度にも出さず、黙々とよくやってくれたものである。それが、ただ母校のために、なればかりでなく、「あの当時の、勤労を愛する学園の実践が、今社会に出て大いに役立つて皆さんから喜ばれ、また自分にもいい修行になった。」と今になって卒業生が当時のことを語り、私を喜ばせてくれる。

三十三年度は、まだ中島新校舎のみでは五百名近い生徒の授業は出来がたいので、旧校舎（可部駅裏）も使って二カ所で授業をしていたのだが、十月に特別校舎が完成したので、少し狭隘きょうあいを感じたけれど、第一校舎十教室、特別校舎四教室、小講堂の三カ所で授業をすることにした。

中島校地内に 三十三年度の終わりから、旧校舎平屋二棟を新校地に寄宿舎として改造移転工事を始めた。この寄宿舎を作る 工事は、また私学振興会で三百万円の借り入れをしたのである。三十四年八月末（木造平屋三一五坪）竣工したので、あちこちに宿泊させていた舎生を一括ここに移らせた。

そのときの舎生の喜びは一入ひとしおであったが、私自身、大事なお子さんを預って、昼夜二十四時間教育をしている私の責任の重大さを痛感していたので、当時としてはこれまた大規模にして完備した宿舎で生活させることが出来るよう

になって、それが私に大きな喜びと安堵をもたらしてくれた。

こうして、一つ一つ生徒のために教育のために築き上げていくことの喜びと希望によって、その間の苦勞は吹き飛んでしまうのである。

商業科新設

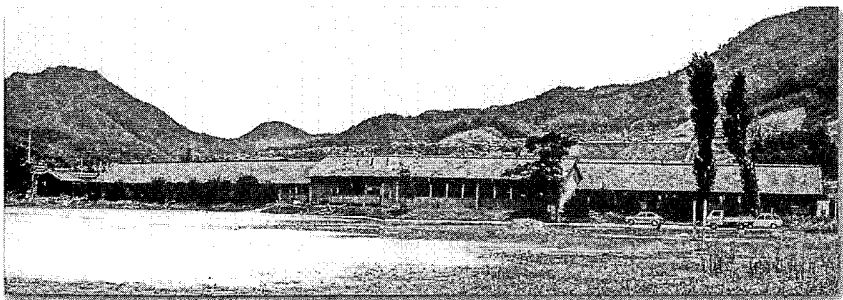
昭和三十四年度には、社会情勢から見て、産業教育の拡充を図らねばならぬと考え、商業科を新設することについて色々と研究していた。大体の計画を樹て理事会にかけたところ、時宜を得た学科新設だということで、決議となった。三十四年（一九五九）一月に県に設置認可申請書を提出していたのが、三月三十一日付をもって正式に認可された。

三十四年度の生徒募集要綱に、商業科設置認可申請中として載せていたのだが、いよいよ認可が下りたので、各中学校にその旨の文章を送ったが、何分にも認可の時期が遅かったので、定員までには至らなかったが、四十名の新入生を迎え、島本正則教諭、横山勉教諭の二人を商業科専任教師として迎え、ここに発足したのである。

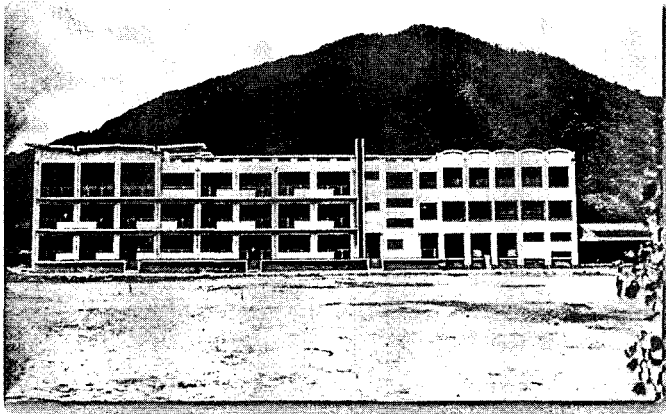
本館建築

学科増とともに、生徒も年々増加するので、校舎増築の必要に迫られた。

普通教室、特別教室は出来上がっているので、今度は管理部門を備えた本館の建築である。本館建築の準備に移った三十四年の秋までは、校地内の田に稲を約三反から四反作っていたが、本館を建てるとなると、もう表の方へ稲を作ることも出来ず、稲の取り入れ直後に校地造成に取りかかった。素人の我々の手ではもはや不可



中島校舎の寮（左 西寮、中央 食堂・舎監棟、右 東寮）



グラウンドから見た中島校舎本館 1961年

能なので、祇園町の桑原組に依頼して造成したのである。

この本館敷地造成とともに、グラウンドも造成することにした。今までのグラウンドは、元の畑であった所を我々の手によって地ならし程度に整地して使用していたので、現在のグラウンド（旧中島校地のこと）の半分足らずであったが、今回は本職の手によって出来たのだから立派なものである。ただしグラウンドの部分は、雨の場合は水はけを良くせねばならぬというので、裏の根の谷川の河原（漁業組合にお願いして）から小石を拾って敷いたのである。これはまた、我々が生徒と共にその作業に当たった。授業の合間並びに放課後を利用して、輪番で二週間くらいでやり終えたのである。

本館は、鉄筋コンクリート建てにすることにした。資金は、ちょうど旧校地の建物を撤去したので、たびたび旧校地を売却しないかといつて来られていた大和重工へ、巷千五百坪ばかりあったのを五十四号線の道路に予定されていたその幅員の中心から西側を譲渡した。その代金とその他を加えて、この建築費に充当したのである。

設計は従来通り河内設計事務所にお願ひした。亀本技師が担当で設計されたが、なかなか工夫を凝らしたデザインで、また建築も入念ですばらしいもので、三十五年九月から取りかかり翌三十六年六月竣工したのである（鉄筋三階建て約七〇〇坪）。

この建物は、鉄筋コンクリート建てで、当時の田舎の学校としては珍しく、近郊にないといって、方々から參觀に來られるような状態であった。

この建物の変わったところは、まず基礎が高くて地下室が物置きになっていること。そして、階段教室（理科室）、整容室（鏡の間）付きの被服構成室（和裁）、各机に電気コンセント付でアイロンやミシンの使用に机を離れないで出来る便利さを考えている被服構成室（洋裁）、そして図書館は天井を高くして明るくしてあるなど、当時としては非常に合理的に近代的に出来ていたと思う。

校舎は立派に出来たが、今にして考えてみると、あの可部の中央である可部駅裏の校地を、今しばらくあのままにして持っていたら、学園の経済運営が楽に出来ていたのではないかと思う。何しろ、私に商売気がないこと、したがってそんな知識もなく思慮もなく経営能力が全然ゼロ、唯々教育一筋に生きてきた人間なので、一生涯貧乏で四苦八苦の経済運営であるが、それでも私は結構楽しい毎日を送ることが出来るというのは、貧しくて苦しい苦しい財政を司りながら、私の好きな教育の仕事に、こんな老齢でありながらも携わることができ、そこに大きな感激と喜びが湧き、毎日を緊張して過ごすことが出来るからである。

三十六年商業科

専用校舎建築

三十四年度に発足した商業科も、三十六年度は完成年度で、生徒数も多くなって校舎全体が狭くなったので、商業科専用の校舎を建築することにして、三月から工事を始め、同八月末に木造二階建て二九五坪が竣工した。

商業科主任で本校商業科の基盤を築き上げた島本正則教諭の喜びは、また格別のものであった。研究室に机・椅子・戸棚・応接セット等を自費で持参し、教室の方は実務室、実践室、簿記・計算実務室等々、ご自分の設計どおりに出上がったので、これを有効に使うことに、さらに緊張の色が見えていた。それを見た私の喜びは、さらにもう一段

上にあつたのである。

校地買収

三十五年十月頃から、短期大学新設の下準備として、現在の校地（旧中島校地のこと）の西側を一

一九七六坪

九七六坪購入し、校地造成に取りかかった。

この短期大学新設は、私のこの学園の建学のときからの懸案でもあつたし、またそのころから地域社会からも、父兄からも強い要望が始めていた時期なので、いよいよ愈々実施の段階に入らねばという意図からである。資金は、このときも理事からの援助を仰いだのである。